

令和7年度長崎県下少年剣道人口調査報告書

普及員会人口調査担当: 荒木純司

令和7年度長崎県少年剣道人口調査がまとまりましたので
ご報告申し上げます。

この調査にあたりまして県剣道協会の事務局をはじめ各地区の事務局、
各道場の先生方のご協力を深く感謝申し上げます。

1 昨年との比各表

		本年度	昨年度	差異	平成22年	差異	平成26年	差異	平成30年	差異
		令和7年	令和6年		15年前		10年前		7年前	
①道場数		98	110	-12	189	-91	164	-66	172	-74
②人口	小学男子	559	614	-55	1,416	-857	1,001	-442	950	-391
	小学女子	350	349	1	668	-318	479	-129	481	-131
				0		0		0		0
	小学合計	909	963	-54	2,084	-1,175	1,480	-571	1,431	-522
				0		0		0		0
	中学男子	485	491	-6	781	-296	721	-236	614	-129
	中学女子	326	354	-28	354	-28	381	-55	308	18
				0		0		0		0
	中学合計	811	845	-34	1,135	-324	1,102	-291	922	-111
						0		0		0
	小中男子	1,044	1,105	-61	2,197	-1,153	1,722	-678	1,564	-520
	小中女子	676	703	-27	1,022	-346	860	-184	789	-113
						0		0		0
小中合計	1,720	1,808	-88	3,219	-1,499	2,582	-862	2,353	-633	

地域別前年度比較表と道場数が一致していないのはこちらの本年度道場数には部員0名の道場は含まれておらず、
地域別前年度比較表には「休部道場」も含まれています。

2 人口変化の内訳

- ① 今年も例年にもれず少年剣道の人口が88名減少している。
特にファーストが東彼杵地区の21名減少。続いて長崎の19名。3位の大村17名と続く(3地区で57名の減少に上る)

逆に増えた地区のトップが松浦地区で10名増員。続いて南島原・五島の7名増員と続く。
- ② 1道場当たりの平均部員数が一番多いのは諫早の24.3名。続いて壱岐の22.0名・西彼地区の21.4名続く。

逆に少ないのは対馬の4.8人。東彼杵・上五島の7.7名と続く。
- ③ 道場部員数では、
相浦(佐世保):46名・真崎(諫早):45名……………以上が40名以上(2道場)
黒髪(佐世保)・真津山(諫早):37名・時津鳴鼓会(西彼):35名
亀舟館(諫早):34名・長与(西彼):32名・有明(島原)31名
微神堂(大村)・大村中央(大村):30名……………以上が30名以上(8道場)

【所見】

(1) 上記のようにまた今年も88名の部員が減少した。1道場約1名の減少となる。

前回増員の施策として次の案を提示した

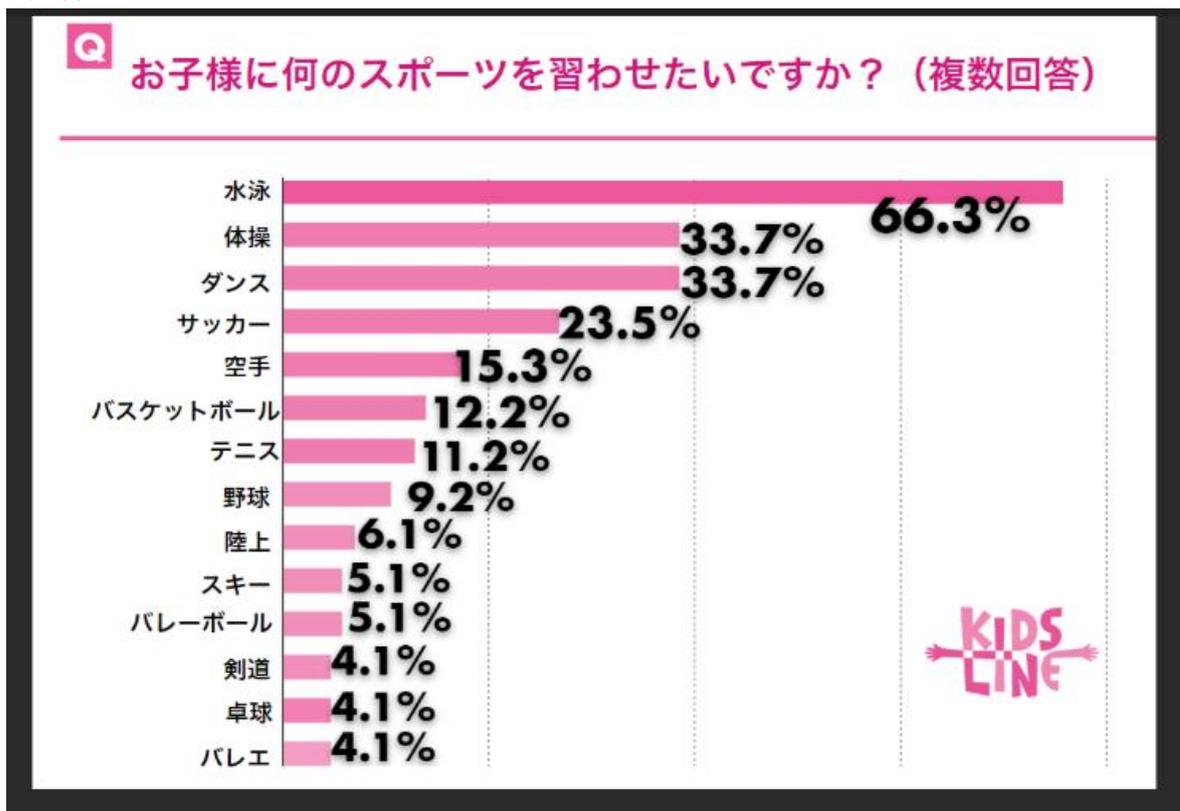
(施策):

- ① 入園児、入学時に剣道の良さを具体的にアピールしたチラシを配布して加入を促す。
- ② ご父兄の方及び剣士諸君がお友達に剣道の良さをアピールし加入を図る。
- ③ 体験会を実施し、興味を持たせる。
- ④ 入部した子供たちを辞めさせない努力をする。

行きつくところこの施策が主流ではあるが、抜本的な改革にはなっていない気がする。

(2) 下記は剣道の人気度を示す資料である。

(資料1)



(資料2)

子どもに習わせたいスポーツ TOP10 ~男の子篇~
(n=172,複数回答)

順位	スポーツ	得票率
1位	水泳	59.3%
2位	サッカー	32.0%
3位	体操	24.4%
3位	空手	24.4%
5位	バスケットボール	19.2%
6位	野球・ソフトボール	12.2%
7位	柔道	9.9%
8位	テニス	9.3%
9位	剣道	8.1%
10位	バレーボール	7.6%

(資料3)

中学生の運動部 人気なのは？

男子	順位	部活名	部員数(人)	女子	順位	部活名	部員数(人)
	1	ソフトテニス	2899		1	ソフトテニス	2782
	2	バスケットボール	2867		2	バレーボール	2463
	3	サッカー	2539		3	バスケットボール	1934
	4	卓球	2514		4	卓球	1919
	5	陸上競技	2123		5	陸上競技	1485
	6	軟式野球	1883		6	バドミントン	960
	7	バレーボール	963		7	剣道	737
	8	剣道	945		8	ソフトボール	596

2023年群馬県中学校体育連盟「運動部員数調査」

(資料1)では剣道の人気は12位。4.1%を示している。この資料は複数回答のためもっと低いと考えられる。

(資料2)の小学男子では、剣道人気は9位。8.1%と少し高くなっている。

(資料3)は2023年群馬県が調べた中学校部活動人気調査の結果である。

男子が8位。女子が7位。

これらの資料から「剣道」に対する人気は7~12位と非常に低いことがわかる。

上記資料から言えることは、剣道の人気は剣道家が思うほど高くはないということである。

それに比べ、同じ武道であっても「空手」は現在非常に人気となっている。

空手の形がSNSでよく発信されている。特に女子の形が非常に人気でフォロワー数も非常に多い。

剣道もユーチューブなどでよく発信されているが、面を着けて試合を行っているから

剣道関係者が見ると魅力的であるが、外部から見ると比較的フォロワー数も少ない。

最近では、元SMAPの木村拓哉さんが中村学園剣道部を訪れたユーチューブを見かけるが

剣道の良さをもっと発信してくれると効果が出てくるかもしれない。

(3) 剣道の環境の昔と今

① 昔の環境

これは大村地区における剣道道場の成り立ちである。

昭和32年頃、当時の大村警察署署長が「戦後間もない子供たちの非行防止のため剣道を促進したい」

と当時の大村の剣道の拠点である「微神堂」を訪れ、協力を申し出た。

これをきっかけに各小学校校区に道場ができ、その指導は当時「微神堂」通う職域の先生方に依頼した。

当時は以前よりあった「微神堂」と「警察道場」に加え、小学校校区及び地域公民館を活用した道場が生まれ

多い時で約26道場、1,000名余(当時の大村の人口は45,000名)の少年少女剣士が所属していた。

しかし今日では150名程度(人口約98,000名。比率からすると当時の7%程度)に減少している。

以前はなぜ多かったのか？

大村地区の例で考えると「非行防止」という「大義」があった。

戦後間もない日本は敗戦から立ち直るため市民は復旧に必死であった。

そのような中、一番不安材料としていたのが子供たちの「非行」であった。

そこに古来の「武道＝剣道」の必要性が生まれた。

このことはどこの地域でもあったのではないかと思う。

「剣道」は礼儀が厳しく・稽古が厳しかった。何故か？「非行防止」を行くためには

子供たちの心を鍛え上げなければならないからであった。

このことによりハードな稽古が当たり前であったし、「剣道」自体が激しいものであった。

「面はぎ1本」「足掛け1本」「竹刀落としの反則はなく、竹刀を落としたり相手の竹刀を奪い

相手を打って勝つか、素手で相手をなぎ倒して勝つか？」

また、剣道は「3倍段」とも言われ、柔道や空手道などの三段と剣道の初段が匹敵する

とも言われた。剣道は投げ技・素手による防御・攻めも当たり前だった。

その当時の先生方の試合をSNSで拝見することがあるが、侵奪で迫力のある試合になっている。

そのような環境の中、「剣道」が盛んにおこなわれてきた。

② 今の環境

今日では、いろんなスポーツが盛んにおこなわれるようになり、それらのスポーツが

これまでは、アマチュアとして活動していたスポーツが、相撲や野球と同じように

職業として、プロとして活動するようになり、オリンピックもない、プロもない「剣道競技」は

人気を急激に下降させてきた。

そんな中、2017年文部科学省は中学生の授業の中に「武道及びダンス」を必須科目として導入してきた。

この時が「剣道普及」の好機ではあったが「中学校教員に剣道の経験者がすくない」「指導するのが困難」「剣道具が高額」「日本剣道連盟が打ち出したカリキュラムが他の競技からすると指導し辛い」などの理由から「柔道」が選ばれるケースが多く剣道を促進する原動力には至らなかった。

(4) 剣道人口増加のための考え

① 複数競技(マルチスポーツ)の時代

昨年(2024年)11月に「日本が目指すべきジュニア期の理想のスポーツ環境とは？」をテーマに筑波大学東京キャンパスでマルチスポーツコンベンションが実施された。

その中で「これからのジュニア期の理想のスポーツ環境は、複数競技(マルチスポーツ)による相互スポーツのスキルアップ」にあるという意見が出ている。

例を上げれば、「大谷翔平選手」は幼少のころ「テニス」もやっていた。

また「松坂大輔投手」は小学生のころ「剣道」もやっていた。

他にも例はあるが、1種目の競技だけではなく複数競技を行うことでめざす競技のスキルアップを図る狙いがあるとされる。

今の日本では、剣道を職業として選択する選択肢がない。

(韓国やアメリカなどでは、道場経営が職業として成り立っているところもある)

従って子供たちにとって、あるいはその親たちにとって剣道は夢がない。

試合の数は多くとも、いくら頑張っても職業として成り立たないからである。

そのような剣道の環境の中で少年人口の増加を図っていかなければならない

その一つとして、剣道を複数競技(マルチスポーツ)のなかのパートナー競技として推奨していくことを考える。

例えば、サッカーをしたい子供に対して「剣道を学ぶことで瞬発力・忍耐力・集中力・瞬間的判断力等を訓練することができまた、礼儀等々を学ぶことで、冷静さを訓練でき、世界に羽ばたくためのスキルアップになるよ」など。

具体的には、道場の稽古日が3回あったとして、2回ないし1回を稽古の励み

他の競技と並行して学ばせることで望む競技のスキルをアップさせてはという考えである。

現在も塾等で週に1回ないし2回しか来ない子供いる。

このことを考えると「複数競技(マルチスポーツ)のなかのパートナー競技として推奨」を考えてもいいと思う。

② 剣道で学ぶもの

i 礼儀の習得: 礼儀とは相手等に表す尊敬の念とともに自己精神の抑圧の修行

ii 集中力の強化: 剣の打突スピードは、160kmとも180kmともいわれる。
その中で相互に打突する訓練を行うので相手から目は離せない訓練を行う。

iii 瞬発力の強化: 相手の気持ちを読んですかさず動く訓練を行う。
相手の動きも早いのでそのスピードに負けない動きを行う訓練を行う。

iv 忍耐力の強化: 剣道は素足で剣道具をお付けてやるため、冬は寒く、夏は暑い。
正座をやり、まるで修行僧のような訓練をやる。正しく修行である。

v 人に対する優しさ・思いやりの修行:道場訓等で人に対する優しさや思いやりを説く

などなど。他にもあるが、これらは剣道で培われる剣道の良さであると思う。

③ 社会で役立つ剣道の修行

剣道にはほかの特性もある。それは段位取得である。

剣道は中学生は二段まで習得できる。

段位は全日本剣道連盟が認定するもので一つの資格として履歴書に書くことができる。

いわば段位は修行の証である。

この段位は返納しない限り、生涯「剣道をやっていた」という証にもなる。

6年生で剣道をやめたいという子供には「せめて中学校で段位をとること」を促し

離脱者を減少させることもできるのではないだろうか。

④ 剣道は「おさがり文化」

2017年文部科学省は中学生の授業の中に「武道及びダンス」を必須科目として取り入れた。

学校であるから剣道具を新調するのも吝かではないが、当時、柔道を選択するのが

多かったのは「剣道は剣道具が高い」という風潮もあったからである。

しかし、剣道は「おさがり文化」がある。

試合等で子供たちの袴の後ろの名前を見ても本人と違う名前が多い。

これは先輩等が使ったものを譲り受け使用しているからである。

剣道具も同じことが言え、竹刀も小学生で使っていたものは中学生では規定があるので

使えなくなり、後輩に譲る。

正しく「おさがり文化」である。

「剣道を始めるにお金はほぼいらぬ」

このことを浸透させることで興味を持つ人が増えると思う。

⑤ 「楽しい剣道」の取り組み

余談になるが、私が初めてプロ野球観戦した時、私は「剣道」の観戦が主であったため

「無言での観戦」を行っていた。しかし周囲を見渡すと「ビールにつまみ」「声出しOK」

応援チームが打つと周囲の知らない人でもハイタッチ。トラウマにとらわれたことを思い出す。

剣道観戦は「無言で、拍手のみ」

確かに重要なルールではある。

しかし、始めて間もない小学低学年生や幼稚園児を捕まえてこれらのルールで縛るのはどうか

と感ずることがある。

試合の時、低学年ルールとして「場外反則は極力避ける」という特別ルールr。

これらをもっと緩和して「小学生低学年特別ルール」として

「口出し応援OK」で家族みんなで楽しく応援する。

部員同士楽しく応援する。などなど。

もっと楽しい剣道を推奨してはどうかと考える。

(5) まとめ

少年剣道の人口減少の要因はいろいろ考えられる。

① 少子化により、子供たちが減った。

② ほかのスポーツが多く増えた

- ③ ほかのスポーツと比べ、オリンピックがない・プロとして職業にはならない
- ④ 剣道具が高く、習わせるにもお金がかかる。
- ⑤ スピードが速く観戦も楽しめない。
- ⑥ 規則(観戦時の態度等)や礼儀に縛られ、家族そろっての盛り上がりがなく面白くない。などなど。

しかし、剣道は「日本に培われた伝統文化」であり「日本人魂の根源」でもある。このような素晴らしい「武道」をなくしてはならないと思うし、子供達には是非この「剣道心」をしっかり身に着けて欲しい。

規則は規則として守っていかなければならないが、規則に捉われ今様を忘れ取り残されても仕方がないと思う。

守るべきことは守り、優遇されるものは優遇し、「剣道という伝統文化」が発展、継承されることを切望するものである。